ドキュメント 石川の祭り

小木とも旗祭り（能登）

巨大な旗掲げ港巡る

伝馬船、大漁を祈願

みこしを乗せた御座船を先頭に、巨大なのぼり旗を掲げた伝馬船が列をなして港を巡航する。県内屈指の漁師町である能登町小木港一帯で、二、三日に行われた県指定無形民俗文化財「小木とも旗祭り」は、大漁を祈願する祭りとされ、旗を豪快にはためかせ、太鼓を打ち鳴らしながら勇壮に港内を巡る光景は圧巻だ。

高さは約20メートル

三日午前六時。九町会の住民が小木港に集まり、高さ約二十メートルののぼり旗を立てる「とも旗起こし」を始めた。二十人がかりでロープを引っ張り、九隻ある伝馬船一隻ごとに一本ずつ旗を起こす。準備が整うと、子どもたちが次々と船に乗り込み、小木港や九十九湾を周回した。

のぼり旗に書く文字は漢字五文字がしきたりだ。以前は大漁を祈願する内容がほとんどだったが、近年は家内や地区の安全などを願う言葉もあり、祭礼委員長の太田均さん(五三)は「祭りの風習も変わってきた」と感じ取る。

今は大人が制作しているのぼり旗は、十五年ほど前までは中学生が集会所や上級生の自宅に寝泊まりして作った。ほかの町会の旗より豪華に見せようと高さを競い合うようになり、かつては十五メートル前後だった旗は現在の二十メートルまで高くなった。

しかし、そんな良くも悪くもあった伝統は、中学生が深夜に集まることは教育上問題があるなどの理由で途絶えることに。太田さんは「上下関係が厳しかったが、社会に出て役立ったこともあった」と懐かしがる。

みこしが合流

伝馬船が小木港を巡る間、住民が御船神社から祭りの主役となるみこしを出し、小木地区を練り歩いた。みこしは担ぎ棒などの傷みが激しく、美川仏壇に修理に出され、先月神社に戻ったばかりだ。天狗の面をつけた猿田彦役の住民が先導しながら、清めの塩を道しるべに、御座船が停泊する小木港を目指す。

大勢の見物客が取り囲む港に、みこしが姿を現す午後三時半すぎ、いよいよ本祭りの始まりとなる。

今年、御座船、伝馬船を牽引する大役を務めるのは、イカ釣り漁船の「第六十八日章丸」。みこしが御座船に近づくにつれ、住民らが続々と御座船や日章丸に乗り込んでいく。みこしが御座船内に入ると、日章丸が汽笛を鳴らし、出発した。

子どもたちが伝馬船や岸壁でにぎやかに太鼓を打ち鳴らす中、船団は二時間ほど港内を巡航、見物客に勇姿を披露した。岸に着いて御座船から降ろされたみこしは、再び住民の肩に乗り、威勢よく御船神社に向けて練り歩いた。（油木玄弘）

▲みこしを御座船に乗せる住民＝同日午後3時35分、能登町小木港

第六十八日章丸に引かれ、能登町小木港沖を巡航する御座船と伝馬船＝3日午後4時55分、北國新聞社ヘリ「あすなろ」から

祭メモ

小木とも旗祭り　御船神社の春祭りで、毎年5月2、3日に行われる。港に停泊した北前船などが祭りの際、「艫（とも）」と呼ばれる船の後部に旗を立てて港内を巡って祭りを祝ったのが発祥とされる。近年は県外からの見物客も増えてきている。